

『中国版刻図録』と『韓国古印刷史』

土屋 紀 義

参考書誌研究・第一八号（一九七九・七）

書物の歴史において、印刷術の導入は、洋の東西を問わず画期的なことである。印刷によって、それ以前とは比較にならない程に容易に、複数の版本が生産できるようになったということは、知識の伝達と享受に計り知れない便宜を与えたのである。その版本が、近代的な印刷事業が世界を征服するまでに、どのような歴史をたどったのか、それをあとづけることは、我々の祖先の文化的な営みの本質をさぐりあてる一助ともなりうるものである。いわゆる書誌学の任務は、究極的な目標をあげるとすれば、そこまで行きつくものであろう。版本が、写本と区別され、それだけで取扱われる意味も、そこにあると言える。前者が、あくまでも、出版者以外の複数の読者を前提しているのに対して、後者は、書写者個人の受用に供せられるに限られる場合が普通であろう。印刷術の利用以後、その傾向は一層強くなったに違いない。

ここに取りあげる二つの書物は、版本の歴史的あゆみを

あとづけることを目的とした書物である。しかも、書誌学という学問の持つ本質的性格を如実にあらわしている書物である。書誌学は、抽象的観念をその対象とするものではない。書物という具体的ものを離れたら成り立ち得ない。文献史料を補助的な材料として取り扱かうことはあつても、それはあくまでも二義的な意味しか持たない。現物に就かない書誌学など砂上の楼閣にしかすぎない。というより、砂上の楼閣を築くことでさえも不可能である。しかし、ここに困難が生じてくる。あくまでも現物に就くといっても、国内各地に分散し、あるいは、国外にすら数多くある資料に一一あたることが、並大抵でできる仕事ではない。この矛盾の一部でも解消するために、すぐれた図録の必要性が出てくる。逆に、書物の歴史をたどることを目的とした著作が、説得力を持つためには、ある体系のもとに有機的に配列された優れた図録を伴うことは必須の条件である。

すでに二十年近くも前に出版された『中国版刻図録』(北京図書館編、一九六〇年一〇月初版、一九六一年三月再版。当館には初版のみを蔵す。請求記号026—P432。東洋文庫に再版のみを蔵す。)と一九七六年に出版された『韓国古印刷史』(韓国図書館学研究會編、日本語版一九七八年五月出版。当館には、元版及び日本語版を蔵す。請求記号は、それぞれY P21—27とY P21—26)は、右に述べたような必要性を満たしている数少ない業績のうちに入るものである。

簡潔な書誌学的記述からなる一点一点の解説を納めた第一冊と、精巧な図録を残りの七冊に配したそれぞれ巨冊の線装本である前者は、その書名からもわかるように、原則として現物大の複製によって、おのずから、版本の歴史的なあゆみと、それぞれの特徴を語らせるようになっていく。それに対して、後者は、図録の他にB四版で百ページを越える長大な歴史的叙述を配している洋装本一冊である。

『中国版刻図録』については、すでに、倉田淳之助氏によって、非常に行きとどいた紹介がなされている。(『ビブリア』二三号、書評欄一九六二年一〇月) 倉田氏の紹介によって、この書物の特徴と長所が非常にはっきりと理解できる。詳細については、この書評を是非一読せられたい。

この書物の編者が、恐らく大いに意を用いたと思われる点で、図の配置を時代別だけでなく、同一時代の中での配列を地域別で行なう方針を強く打出していることがある。わずかに半年たらずの間に改訂版を出して、何を変えたかという点、清代の資料例を倍に増やした点と、あとは地域による配列をより厳密に体系化したに略ぼつきる。他は、解説文の極く一部に内容とはほとんどかわらない変更を加えたにすぎない。このことをもってしても、編者の意図の所在が良くわかるであろう。その結果、例えば、時代は違っても、同一地方の版本に共通性を見出すことができ、また、逆に当然のことながら、同一時代の版本でも、出版された地方が違うことによって相当な相違の生じていることが一目瞭然に見てとれるのである。その結果、これまで困難であった版本の時代決定が容易になったことは、いわずもがな、版本の時代背景についてもより確かな手がかりが得られ、それによって、さらに、版本を、どの時代、年代に帰属させるかという判定が下し易くなるであろう。倉田氏は、解説、図録の中からさらに、つぎのような注目すべき点を指摘している。時代による匡郭の変化、刻工名の調査を、これまで比較的進んでいる宋元版から、さらに明版以降についてまで拡げるべきこと、書体の違いを整理し、それによって、時代的、地域的特徴をつかむこと、その他数点。五百件を越える資料が七百葉に達する図

版によって、一点に集められた結果、これまで、漠然とわかっていたようなことがよりはっきりとし、見えなかつたことが見えるようになり、さらに新たな課題が提出されるであろう。倉田氏も指摘するように、この書物は、欠点の存在を免かれるものではない。しかし、それは、新たな研究の出発点ともなり得るであろう。

すでに触れたところからもわかるように、『韓国古印刷史』は、朝鮮印刷史概説と、図録との両方の役割を果たすものである。そして、一冊の本の中にこの二つの要素をはめ込んだ結果、やや内容に統一の欠ける傾向があらわれたことは否めない。

その内容は、大きく三編に分けられる。第一編が、さらに、一、木版印刷術の濫觴および普及、二、木版印刷術の発達、三、活字印刷術の起源および発達、の三章に分かれている。このいわば朝鮮印刷史概説という部分において、著者が最も力を注いでいると思われるのは、近來の発見に係る資料によって、従來の学説の再構成を目論み、かつ、近世朝鮮の印刷術の精華とも言うべき、活字印刷術の展開を詳細にあとづけるといふ二つの点である。この二点の論述を通じて、さらに、韓国の古印刷術が、世界印刷史上において、如何に高い位置を占めていたかを明らかにしようとするのである。その例として、まず、第一に、新羅時代の陀羅尼印経がとり上げられる。従來、世界最古の印刷さ

れた「書物」とされていたのは、日本の法隆寺に所蔵されていた百万塔陀羅尼であるが、著者は、新羅の陀羅尼印経が、これよりも二十年程さかのぼり得ることを論証し、さらに、その印刷方法等の詳細な点にまで立ち入って、年代的に早いだけでなく、内容もすぐれていると主張している。ついで、記念碑的事業として、高麗版大藏経がとりあげられる。そして、それらの成果の集大成ともいえる形で、活字印刷術の展開があとづけられるのである。朝鮮の古版本史において、活字本が、その中心をなしており、しかも、それが非常にすぐれたものであるというのが、特徴であることは、今さら言うまでもないことである。従って、叙述の重点は、当然そこに置かれることになる。ただ、一般的な概説という観点から言えば、たとえ二義的なものであれ、しかも、朝鮮印刷史の初期においては非常に重要な役割を果たしている整版印刷術のその後の展開について触れてほしいし、また、何故、活字印刷術が、近世において、かほどに盛行したのか、その背景についても考察がほしい。とりわけ、隣接する中国、日本において、夫々の近世と呼ばれる時代に高揚した出版文化を支えていたのが、整版印刷術であることを考えるならば、この点は、一層重要になってくるのではあるまいか。

書物の出版は、文化の伝達と必ず表裏一体の関係にあるべきものである。本来、書物は特殊な美術品ではないはず

である。中国、朝鮮、日本と限らず、広範な出版文化から遊離した、出版物が、如何に優美なものであろうと、それは、一種の奇型にすぎないのではあるまいか。

第二編は、英文の梗概であるから、特にとりあげる必要はない。

第三編が、恐らく、本書の目玉とでも言うべきものであつて、これまで、殆んど類書を見ないものである。その内容は、一、古活字標本および解説、二、韓国古活字年表、三、韓国古活字対比表、からなつてゐる。一では、実物大の複製標本一つ一つにかなり詳細な解説をつけ、これを活字の種別によつて配列している。二は、古活字史の詳細な年表、三は同一の字を活字の種別によつて、対照した表であり、それぞれの活字の特徴、相違が一目でわかる様な工夫がしてある。複製は、非常に良くできており、実物のおもかげを十分に伝えることに成功している。三つの項目ともに、朝鮮古活字の特徴を十分に把握して構成されておゝり、その内容の充実度から行つても、今後の古活字版研究は、本書をよりどころにすることなくしては、成り立ちえないであらう。

なお、当館には、韓国図書館学研究会編『韓国古印刷資料目録』（請求記号UM28—2）が所蔵されている。内容は、『韓国古印刷史』にくらべるとはるかに簡略ではあるが、図録は、整版の書物、版木、印刷用具にまで及び、はるか

に広い範囲にわたつてゐる。両書をあわせ見ることによつて、さらに広い展望のもとに、朝鮮の古印刷術史を通覧することができであらう。

最後に、筆者が利用した日本語訳本について一言触れておきたい。この訳本は、誤植がむやみやたらに多いという重大な欠陥を持つてゐる。さして詳細に調べたわけでもないのに、二ページ足らずに一個程の割合で誤植があらわれる。余程杜撰な校正であつたに違いない。従つて、日本語訳を利用する際には、相当の注意を必要とする。訳語にも、日常の日本語の感じからは、首をかしげざるを得ない箇所が散見する。改訳、改版の際には、この点を是非改善してもらいたい。折角の優れた内容の書物に大きな傷をつけてゐるのは残念である。

（つちや・のりよし 一般参考課）